

「共生の文化研究」8号の刊行にあたって：退職の挨拶と引継ぎを兼ね

多文化共生研究所前所長（現放送大学教授） 稲村哲也

本年4月に放送大学に着任することになり、愛知県立大学の教授職と多文化共生研究所の所長職を3月末で退任いたしました。これまでの研究員、客員研究員、職員、関係各位のご協力に心から感謝いたします。

定年まで2年を残す退職で、急なことだったため、みなさまに大変ご迷惑をおかけしましたが、この4月から杉山三郎特任教授が所長に就任し、亀井伸隆准教授が所長代理となり、新体制がスタートしました。私自身は客員研究員として在籍し、引き続き微力ながら研究所の活動に協力することとなり、本誌8号についても編集を引き続き担当しました。この機会に、引継ぎの意味もこめ、以下に、研究所設立と本誌発刊の目的や経緯を簡単に述べ、また本誌バックナンバー（研究所HP：<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/tabunka/>にて参照可）を通覧しながら、研究所における私自身のこれまでの活動の概要を述べ、退任の挨拶にかえさせていただきます。

■研究所設立と本誌の発刊

2008年4月、大学院国際文化研究科附置の多文化共生研究所の設立とともに、本誌を創刊した。研究所設立と本誌創刊の目的と経緯については創刊号に記載したが、ここでも簡単にふりかえりたい。

地球全体で環境破壊が進み、私たちの社会は益々リスクが増大し、国際社会における暴力の連鎖、地域社会におけるいじめの連鎖、すさんだ心・病んだ精神が蔓延しつつある中で、大学は何をすべきなのか。本学は「成熟した共生社会の実現に資する」ことを理念として掲げている。本学は、「地方」の「公立」の「中規模」の「複合大学」という特徴をもっており、外国語学部、教育福祉学部、日本文化学部、情報科学部、看護学部という多角的な要素をもちあわせている。それらの多分野の研究・実践を個別的でなく複合的にしていけば、効果的な地域貢献も可能となる。また愛知県という「日本の縮図・世界の縮図」という地域特性を活かし、地域に密着した研究と国際的な研究を総合することで、研究と実践を活性化することも可能である。そうした基本的な考えのもとに、学内の緩いヨコの繋がりを重視した（学内での共生に基づく）「共生」を理念とする研究所を構想した。総合的な意味での「共生」をキーワードとして念頭に置き、各教員が研究・教育・地域連携の実践に連携して取り組むための拠点として構想したのである。

設立の構想は2002年頃の将来計画委員会での「地域連携センター」構想の中で生まれた。同センターの設立の経緯については、地域連携センター2007年度（初年度）年報で述べているので参照していただきたい。先に述べたように、本学の公立の地域複合大学という特徴から、まず「共生」を理念とする地域連携センターを構想した。「共生は本学全体の研究・教育の理念としてふさわしい」という方向で議論が進み、「多文化共生」「環境共生」「科学技術との共生」の3本柱が本学の理念として定められた。その実践のための仕組みとして地域連携センターがまず設立された。このセンターは、研究主体とはせず、地域との連携活動の窓口・コーディネート・情報蓄積発信などの機能をもつ組織とした。そこで、研究と実践活動の拠点として（競争的経費・外部資金の受け入れ母体としても）、また学部・研究科横断的な連携の拠点としての研究所がぜひとも必要となったわけである。

研究所は国際文化研究科に附置されたけれども、すべての学部・研究科所属の教員に開かれており、本学のヨコの（多分野）の交流を目指している。研究所のメンバーはすべて学部・大学院との兼務であり（特任教授の杉山三郎現所長だけが専任）、研究所の活動に専念するというわけにいかない。メンバーに過重の負担があっては長続きしないので、緩いヨコのつながりをモットーとしてきた。具体的には、各所員は、それぞれ自分の専門の研究に従事しながらも、「共生」を念頭におきながら日常の研究・教育に取り組み、特定のプロジェクトや行事を企画し、また参加することで実践活動にも取り組むという形式をとってきた。外部の研究者やNPO活動実践者、先住民族の活動家など多くの方々との交流も行ってきた。

本誌もそうした研究所の基本理念と実践を反映して、多分野の研究者の間の相互理解・交流を意図し、論文だけでなく、活動報告、研究エッセイ、フィールドノートなどの多面的な内容を維持してきた。創刊号の研究エッセイを読んでもいただくと、多くの研究員が共有してきた思いを理解していただけると思う。

■本誌で振り返る研究所における活動

本誌は今号で8号となった。本誌の3号と7号は杉山三郎現所長が企画した国際シンポジウムに関連した論文の特集である。他の6つの号については私が編集を行った。そこで以下では、それらのバックナンバーの内容

のうち、研究所における私自身の活動と関係が深いものを中心に通覧してみたい。そのため、本誌に掲載された重要な多くの研究論文や学術シンポジウム報告等については割愛させていただく。

<創刊号（2008年4月）：研究所に託した思い>

まず、創刊号では、研究所設立と本誌創刊の目的、理念、経緯などについて述べたあと、佐々木雄太前学長に「人間の世紀・共生の時代に向かって」とい巻頭論文を投稿していただいた。そして、研究所の創設メンバーの研究者、準研究者に相当する大学院生らに、自分の専門や経験に基づいた研究エッセイ、フィールドノート、論文などを寄せていただいた。それぞれのメンバーの熱意がこもった力作がそろい、研究所と本誌の大きな可能性を感じることができた。私自身も、「なぜ文化人類学？ なぜ共生？」というタイトルの研究エッセイで、文化人類学研究と関連づけながら、研究所設立への思いを述べさせていただいた。

<第2号（2009年3月）：その後の研究所の活動を方向づけた2008年度 >

2008年度には、研究所の中心的活動として、私自身もラテンアメリカ研究者として大いに関心をもっており、また保見団地（豊田市）などのブラジル人集住地域を抱える地域の問題として研究所にとって重要な課題である「日系ブラジル人」に関するシンポジウムなどを企画した。第2号でその特集を組み、山本かほり研究者、松宮朝研究者らが中心となって実施した研究の成果、伊藤浄江氏（NPOトルシーダ代表）、大谷かがり氏（中部大学助教・看護師、当時本学大学院生）らのNPO活動、小池康弘研究者が企画したシンポジウムの報告、柳瀬フラビアさん（当時・国際基督教大学学生）、矢馳シンチアさん（当時・本学文学部研究生）の体験・エッセイなどを掲載した。

2008年には、私自身は、洞爺湖サミットにあわせてアイヌの方々がイニシアティブをとって開催した「先住民族サミット」アイヌモシリ2008に参加した。この「サミット」への参加は、その後の研究所における私の活動（および地域連携の実践活動）にとってたいへん大きな方向づけとなった。「先住民族サミット」の総括代表は萱野志朗氏（「萱野茂 二風谷アイヌ資料館」館長）であった。萱野志朗氏のご尊父は故萱野茂氏（元参議院議員）である。私が野外民族博物館リトルワールドに入ったばかりの1981年ごろ、二風谷に萱野茂氏を訪ね、アイヌ村建設をお願いしたという経緯がある。1982年には萱野茂氏が二風谷のアイヌのみなさんを率いてリトルワールドでアイヌ村の建設をしていただいた。それから約30年を経て、二風谷で「先住民族サミット」が開催されることを天野圭子さん（当時大学院生、北米インディアンの研究）から聞き、現地に駆けつけた。「先住民族サミット」では、世界各地から集まった先住民族のみなさんの間の熱い連帯と感動の「おすそ分け」をいただいた。また、そこで萱野史朗氏の知己を得た。日系ブラジル人の柳瀬フラビアさんもこのサミットの英語通訳ボランティアとして参加していた。少し前に浜松で開催された日系ブラジル人に関するシンポジウムで彼女の体験（来日して学校でのいじめや困難を克服した大学進学を果たした）についての感動的なスピーチを聞いていたので、「先住民族サミット」でお会いして驚いた。

この年、愛・地球博記念公園（モリコロパーク）公園マネジメント会議で活動を共にしているNPO「どんぐりモンゴリ」の角和保明氏が招へいた中国残留婦人の烏雲（ウユン）さんの講演「大地の子 日中の架け橋」は大きな衝撃と感動と与えた。

さらに、2008年5月には中国四川省で発生した震災が大きな被害を出したが、研究所として直ちに、本学の協定大学である四川師範大学と協力して支援活動を開始した。王曉葵氏（当時研究者、現在、上海大学教授）と私は現地視察に行き、とくに被害が大きかったチベット自治地域を中心に支援することにした。その現地報告「四川大地震被災地チベット族・チベット族地域 視察」と、王曉葵氏による四川地震の記録と記憶伝承に関する研究論文を掲載した。

以上のように2008年度は研究所が設立されたばかりで、その活動を模索していたが、振り返ってみると、北海道で開催された「先住民族サミット」への参加と、四川大地震への支援活動が、その後の私自身と研究所の活動を大きく方向づけたと言える。

<第4号（2010年3月）：2009年度の主な活動は生物多様性条約締約国第10回会議に向けた準備>

2009年度は比較的平穏な年であった。第4号で杉山三郎現所長による「テオティワカン月のピラミッド発掘期」が3回の連載を完結したが、それにあわせて、アンデス考古学の権威である大貫良夫氏（東京大学名誉教授、東大アンデス考古学調査団元団長、現リトルワールド館長）にお願いし、「アンデス考古学遺跡発掘50年の軌跡」のインタビューを掲載した。また、翌2010年に愛知・名古屋での開催が決まっていた生物多様性条約締約国第10回会議（COP10）のパートナーシップ事業として、「先住民族の視点から自然との共生を考える」ことを意図したシンポジウムや講演会などを開催した。前年の「先住民族サミット」を機に知己を得ていた、萱野志朗氏、アイヌ支援のNPO活動をしている名古屋出身の本多正也氏、アイヌの叙事詩ユーカラ朗誦・アイヌ民族音楽の現代的表現・神話モチーフの版画制作などで活躍している結城幸司氏ら、また、世

界の森を歩き先住民族の暮らしも研究対象としてきた山田勇氏（京都大学名誉教授）の協力を得てシンポジウム等を開催し、第4号にその記録を掲載した。そうした活動の過程で、「瓢箪から駒」のごとく、「2010年にカナダ・サミットの機に計画していた先住民族サミットが開催できそうもないので、愛知県立大学とWIN-AINUとが共同して、COP10の機会に愛知で先住民族サミットを開催しよう」という流れができた。WIN (World Indigenous Network) - AINUとは、「先住民族サミット」 in アイヌモシリ2008を主催した、萱野志朗氏らのアイヌのグループがそれを引き継いで設立した組織である。

<第5号（2011年3月）：「先住民族サミット in あいち2010」（世界さとフェスタ）開催で暮れた2010年度>
研究所のこれまでの活動の中で最も大規模なものは、2010年の生物多様性条約締約国第10回会議（10月18日～29日）を機に実施した「世界さとフェスタ」である。「世界さとフェスタ」は、杉山三郎特任教授が企画した「世界古代文明フォーラム」（10月7日～9日）と私が担当した「先住民族サミット in あいち2010」（10月15日～18日）の二本柱で構成した。これは本学とWIN-AINUと朝日新聞名古屋本社の共同主催のイベントとした。予算は、本学の理事長特別研究費と朝日新聞社の自主経費と同社を通じた企業協賛によった。総合地球環境学研究所、野外民族博物館リトルワールド、（財）森林協会が共催となり、椋山人間学研究センター（椋山女学園大学）、京都大学東南アジア研究所、中部人類学談話会、南山大学人類学研究所、愛知県立芸術大学の協力も得て実施した。

「世界さとフェスタ」開催のきっかけは、2009年4月に本学キャンパスで開催された朝日新聞社主催「にほんの里フェスタ」である。このイベントの責任者は本学卒業生で朝日新聞社統括センター長（当時）の中根勉氏と朝日新聞社広告委員（当時）の日丸美彦氏であった。開催直前に私はこのイベントのコーディネーターを頼まれたが、イベントが成功し、その二人との打ち上げの席で「次はせかいの里フェスタ」をやろうという話がもちあがった。そのときの私の頭の片隅にあったのが「先住民族サミット」アイヌモシリ2008であった。日丸氏は、「にほんの里フェスタ」の後に、私と王暁葵氏が計画していた四川復興支援のためのチャン族自治地域の視察に同行し、そのあと文化人類学を本格的に学びたいという思いを強め、2010年4月に社会人として大学院（夜間主コース）に入学した。そして、「先住民族サミット in あいち2010」開催にあたって、朝日新聞社社員と本学大学院生の「二足のわらじ」で活躍してくれた。

「先住民族サミット」では、理念としては、「生物多様性」と「文化多様性」の関連性とその両者の重要性を訴え続けた。そして、民族芸能祭やシンポジウム等のイベントを通じて、海外から集まった多くの先住民族の方々と日本のアイヌのみなさんの間で、さらに、彼らと生物・文化多様性の理念を共感するマジョリティの側の者（わたしたち）との間で、一定の相互理解と共感を得ることができたと思う。最後に「先住民族サミット in あいち2010」宣言をまとめることができた。生物多様性条約における先住民族の立場の重要性や、本会議では弱かった「生物多様性における文化的側面の重要性」を訴えることができた。地域や国際社会へのアピールは、朝日新聞社と共同することで、効果的に発信することができた。

「先住民族サミット」開催の前の夏休みの一ヶ月間は、総合地球環境学研究所のプロジェクト研究のためペルーに行かなければならなかった。そのとき標高4500mのアンデス高原で落馬して肋骨を折ったが、帰国後は準備の忙しさは肋骨の痛みも忘れてしまうほどだった。小さな公立大学の能力を超える大イベントであったし、私自身の能力をはるかに超えていたが、「世界さとフェスタ」は大成功をおさめたと言える。その成功の基は多くのスタッフの協力だった。その数が多すぎて、ここでは述べることができない。多くの人びとの交流が、大きな財産として、また大切な記憶として残った。その記憶は、本誌第5号「特集：先住民族サミット in あいち2010」に掲載し、記録としても残すことができた。

なお、2010年5月には、中国四川省の震災復興の支援活動の一環として、中国の被災地で再建された小中学校における（防災教育を含む）教育の向上を目的とした、チャン族自治区からの教育使節団の一行を受け入れた。神戸や地元愛知での学校訪問に加え、日本と中国での地震についての情報と意見の交換、さらに東南海地震への備えなどをテーマとしたシンポジウムと文化交流を行った。その記録は第6号に掲載した。

<第6号（2012年3月）：3.11が起こった2011年度は、前年の「先住民族サミット」をふまえ、一連の「災害と向き合う地域づくり」事業、および「森と草原の地球教室」を開催>

2010年の「世界さとフェスタ」開催期間中に、GISPRI（地球産業文化研究所）の愛知万博の理念継承事業の助成に応募し、2011年度の採択が決まった。「先住民族サミット」のような活動を継続させるため、生物と文化の多様性や持続的社会的な重要性を次世代に向けてアピールする学術的かつ実践的な事業である。

2011年3月はブータンで文化人類学のフィールドワーク（主にヒマラヤ高地の牧畜社会の現地調査）を行っていた。3月11日は、ブータン極東部の調査地に向かっていたが、ブータン人共同研究者の携帯電話に日本の地震と津波の情報が届いた。詳細がわからなかったため、以前から発生が危惧されていた東海地震ではないかと思った。数日後に首都ティンプーに戻ってテレビを見ると、CNNなどで、東日本大震災による津波と原発

事故のニュースが、「日本崩壊」のシーンのように、繰り返し放映されていた。

帰国後、研究所として何をすべきかを模索した。GISPRIの助成を活用し再構成することとし、「環境と災害に向き合う地域づくり」をテーマとしたフォーラム等を企画すると共に、秋のメイン・イベントとして、子ども向け・親子連れを主な対象とした「森と草原の地球教室」を企画した。「森と草原の地球教室」には、ネパールからカナル・キソル（本学非常勤講師）夫妻、カメルーンの亀井伸隆研究員の調査地域からバカ民族（ピグミー系）のメッセ・ベナン氏、モンゴルからバートルガ氏（モンゴル国立大学教授、本学大学院国際文化研究科修了・博士学位取得）、北米インディアンのデニス・バンクス氏が参加した。キソル氏が調査対象としている森の狩猟民（サルだけを狩猟し、森の木の加工品を穀物と交換して生活している）ラウテ民族の家の作り方を、メッセ氏がバカ民族の家の作り方を、親子づれのグループに指導し、グループ毎に家を完成させた。このイベントの参加者の満足度は100%だった。この事業では、宮崎喜一氏（愛知県立芸術大学非常勤講師）と名川敬子さん（アトリエ・フラワーチャイルド主宰）に運営に全面的に協力していただいた。また、メッセさんの通訳とお世話を服部志帆さんにしていただいた。日本からはアイヌ文化の伝承活動をしているミナミナの会（代表藤戸裕子さん）が参加した。また、開催中に、「先住民族サミット」に続いて、フィリピンの著名な映画監督であるキッドラット・タヒミック氏が予告なしに現れた。このイベントも多く協力者のおかげで大成功をおさめた。協力者の数が多くて述べることができないので、ぜひ本誌6号を参照していただきたい。

「環境と災害に向き合う地域づくり」では、私たちが震災にどう向き合うべきかを模索するために、東北で支援活動をしている方々を招いて報告してもらう活動から始めた。とくに、石巻で「地域の祭りの再生」などを真っ先に企画するなどのユニークな支援活動を展開していた肥田浩氏とそのグループにたいへんお世話になった。建築設計デザインや都市計画などをご専門とし被災地復興支援に取り組んでおられる北川啓介氏（名古屋工業大学大学院准教授）にも支援活動についてお話いただいた。また、本学卒業生で私の教え子でもある看護師（卒業後に専門学校で資格を取得した）の塚本可奈子さんにもボランティア体験を学生たちに語っていただいた。私自身、肥田さんのお世話で、何人かの学生たちと共に現地でのボランティア活動にも参加し、大いに学ばせていただいた。

また、フィリピンのルソン島山岳地域で先住民の青少年グループを対象に、演劇を通じて環境との共生や多文化共生の重要性を再認識する活動をしていたCGN（コーディリエラ・グリーン・ネットワーク）の反町眞理子さんから、名古屋での現地の少年たちによる演劇の公演を依頼され、それが実現した。この事業は私の海外出張とちがってしまったため、本学に着任し研究員となったばかりの亀井伸隆准教授と日丸美彦氏に運営をお願いした。公演は名古屋市芸術創造センターと東海高校で行われ、東海高校ご出身の加藤史朗氏（本学名誉教授、当時研究員）にもご活躍いただいた。この公演にあわせてフォーラムを開催し、フィリピンにおける文化人類学研究と災害復興支援活動に長年従事してこられた清水展氏（京都大学東南アジア研究所所長）、愛知からのボランティア活動を継続的に組織し実践しておられる久田光政氏（東海高校教諭）、反町眞理子さんに、環境・災害・復興支援などについてお話いただいた。このとき、久田光政先生には「大学は何をやってるんだ」と喝を入れられた。それが佐々木雄太前学長を動かし、本学でも岩手県に独自の復興支援ボランティア・バスを送り出すきっかけとなった。

■2012年度の研究所の主な活動

最後に昨年度の研究所の活動をまとめておきたい。大型の競争的資金・外部資金による大規模イベントを実施した2010年度-2011年度と比べると、2012年度の研究所としての活動は地味ではあったが、研究員、事務担当者、大学院生・学生、協力者のみなさんのおかげで一年を通じて地道な活動を行うことができた。

特筆すべきは、杉山三郎現所長が長年にわたるメキシコ考古学研究と国際交流の努力が認められ外務大臣表彰を受賞されたことである。7月にその記念特別講演会を開催した。

亀井伸隆研究員（現所長代理）の主導で開催した公開講座「文化の記録と映像表現」は専門家の川瀬慈氏（国立民族学博物館助教）今後の研究による民族誌映像の上映と解説・理論であった。また、同じく亀井研究員の主導による、「音のない3.11」上映・講演（今村彩子氏：映像作家、愛知県立豊橋豊学校高等部卒業、愛知教育大学卒業）など、一連の「ろう文化」に関わる催しもたいへん意義深いものであった。研究所の活動としても、また本学の研究教育活動においても、ひとつの個性的なコアになるべきものとして大いに評価し、また今後期待したい。次頁に研究所の活動一覧を掲載したので、参照していただきたい。

<フィリピン・ルソン島“Kapwa3”への参加>

キッドラット氏は、翌2012年6月に出身地のルソン島のバギオで、一週間にわたって、先住民族の文化と知恵を学びあうイベント「Kapwa3」を開催した。彼は、「ミナミナの会」などのアイヌのみなさんを招きたいと、私にその仲介を依頼してきた。結局、Kapwa3には、アイヌを代表して、萱野史朗氏、島崎直美さん、藤

戸裕子さん、そのお父さんの藤戸幸男氏らが参加した。CGNの活動（先住民族の若者たちによる環境創作劇）を修士論文のテーマにした日丸美彦氏（朝日新聞社、本学大学院生）、アイヌ民族支援の活動をしている本多正也氏らも参加した。Kapwa3にはデニス・バンクス氏も招待された。キッドラット氏は、清水展氏や広田奈津子さんからの情報で、「先住民族サミットinあいち2010」と「森と草原の地球教室」に自発的に参加したが、Kapwa3の企画にはそれらのイベントの内容と人脈が大いに活かされていた。私たちの活動が海を越えて波紋を広げてくれたことは、大いに嬉しいことであった。フィリピン語の“Kapwa”とは“shared space”とか“shared self”とか訳しうる語である。Kapwa3にはフィリピン各地の先住民族のグループが多数参加し、海外からは、アイヌのみなさんとデニス氏のほか、モンゴル、タイ、インドネシア、カナダからの参加があった。学術的なフォーラムに加え、各民族の芸能や伝統の技が披露された。藤戸幸男氏と助手の斉木氏は期間中にイフガオの芸術家とともにアイヌの木彫（トーテムポール）を完成させた。日本チームのアイヌのみなさんとOGNの存在感は非常に大きかった。この“Kapwa3”については、参加者のみなさんの報告等を、第8号に特集として掲載した。

No.	イベント名	開催日程	開催場所	主催・共催・協力等
1	<公開講座> 「文化の記録と映像表現 -民族誌映画の目指すもの-」	2012年 6月20日 (水)	学術文化交流セ ンター多目的ホ ール	主催:教育・研究活性化推進費 事業 共催:多文化共生研究所 協力:地域連携センター
2	<懇談会> 「アフリカ・トーゴ共和国ボジョナ大 使との懇談会」	7月11日 (水)	旧学長公舎	主催:国際交流室 協力:多文化共生研究所、駐 日トーゴ共和国大使館、日本 トーゴ友好協会、他
3	<講演会> メキシコ国立自治大学教授 カルロ ス・ウスカンガ氏 講演会「戦後の日 本・メキシコ文化交流-回顧的分析-」	7月17日 (火)	学術文化交流セ ンター小ホール	共催:外国語学部スペイン語 圏専攻、多文化共生研究所
4	<特別講演会> 杉山三郎特任教授 外務大臣表彰記念 特別講演会「世界遺産を掘る:メキシ コ考古学の魅力と伝統文化」	7月27日 (金)	学術文化交流セ ンター小ホール	主催:多文化共生研究所 共催:地域連携センター
5	<フォーラム・イベント> 人と自然の共生国際フォーラム 「持続可能な社会を目指して、理念か ら行動へ、今変わる時」	10月13日 (土)	愛・地球博記念 公園内地球市民 交流センター	主催:人と自然の共生国際フ ォーラム実行委員会 (愛知 県、愛知県立大学 他)
6	<フォーラム> 「モンゴルの多面性とその現在」 【セッション1】二つのモンゴルの現在: モンゴル国と中国内モンゴル自治区 【セッション2】モンゴルにおける社会変 革とマイノリティ:カザフ民族の場合	10月22日 (月) 10月23日 (火)	学術文化交流セ ンター講堂 S201教室	主催:多文化共生研究所 協力:地域連携センター
7	<映画上映+講演> 「音のない 3.11」	12月17日 (月)	学術文化交流セ ンター講堂	主催:多文化共生研究所
8	<講演会> 「ろう者の文化、聴者の文化」	12月24日 (月)	学術文化交流セ ンター講堂	主催:多文化共生研究所
9	<講演会> 「手話ライフの表と裏」	12月25日 (火)	S201教室	主催:多文化共生研究所
10	<公演> 「ルーマニア・トランシルヴァニア地 方の民族芸能:公演と解説」	2013年 1月21日 (月)	学術文化交流セ ンター講堂	主催:多文化共生研究所